半島青年に寄す[[1]](#footnote-1)

香山光郎

朝鮮青年と菩薩行

因果

　諸君。時は正に決戰の時である。この處は太古寺であり、集まつたわれわれ[は]國のために身を挺して立ち上つた青年挺身隊である。今夜諸君のお集まりを[願]つた譯は、余の所信を諸君の前に披瀝して、諸君の批判を仰ぎたいためである。いな、もつと率直にいふならば、諸君が余の信念と同じ信念をもつて居られることを發見せんがためである。余の信念と諸君の信念とが同一であることが分れば、こゝに集まつたわれわれ一同の信念が同一であるわけである。一旦信念が一つであることがわかつたならば、われらは生死を共にする固い固い同志となるのである。

　諸君。私は因果を信ずる。前生、來生を信ずる。わが不滅を信ずる。これは、お釋迦さまが教へたまふた宇宙の根本眞理である。諸君と余と今夜この處で集まつたのは決して偶然ではない。この宇宙間に決して偶然といふものはない。孔子も「臣弑其君、子弑其父、非一前一夕之事、其所由來者漸矣、由辨之不早辨也」といはれた。源のない河がない如く、原因のない結果はないのである。だからこの會合の由つて來るところ實に遠いのである。われわれが同じ挺身隊員になつたことも決して、偶然でも氣まぐれでも、突發的なものでもない。その由つて來るところ、實に遠いのである。況して、われわれ同じ時代に、同じ朝鮮に生まれ合せたことは、誠に大きい大きい因緣であつて、われわれの行き方如何が、また、われわれの及びわれわれの子孫の方向を定めるものである。われわれは、各々われわれの父や母の子として生まれた。これも避くべからざる因緣である。内地人と朝鮮人とが同祖、同根、同血、同魂、同文化の一つの民族でありながら、千餘年間異民族の如き疎遠な生活をしたのちに、再び一民族となつて、同じ大君の御民となり、同じく、汗と血によつて、この國土を守ることゝなり、大東亞を建設する聖業翼賛の重任を負ふことになつたのは、實に大因緣中の大因緣といはねばならない。いまだに、内地人中にも、朝鮮人中にも、この重い重い因緣に眼醒めないものがあるのは、實に遺憾の極みであるが、御稜威と、吾人の努力によつて、近き將來に必らず、兩者は、もともと一つであり、現在一つであり、未來永遠に一つであることがわかるであらう。斯様に余は、因果を信ずるものである。内鮮一體も深い避くべからざる因緣であつたのである。余は、諸君が、余とともに、この因果の眞理を承認せむことを希望するものである。

みいつ

　余は、御稜威と努力によつて内鮮は完全に一つとなるといつた。その通りである。一家の幸不幸は、その家長の福徳の有無による。その家長たるものが、徳を積んだものならば、その家に不幸は來ない。無病息災であり、子供はよく育ち、農業もその他の等も榮える。その家には福徳の相が現れ、その家族の者の顔やことばも芽出度い相を帶びるが、その家長の積んだ徳の力が盡きると、いろんな、凶兆が現れて、いろんな不幸が起る。病氣は茂くなり、良薬も利かない。家族の心は荒んで、和が破れ、予供たちは不良となり、家畜も榮えない、何をやつても思ふやうに行かない、慾ばかり盛んになるが、惡業の報いにより理知が暗まされるから、事々に間違つた判斷をして、失敗に失敗を重ねて、そこでますます、道に背いたことをして、その罪惡貫盈すれば、つひにその家は亡びるのである。

諸君は、今は、家長ではないかも知れぬが、家長になつた時を想像されるがよい。實に兢兢たるを禁じ得ないであらう。諸君に因緣あつて生まれて來る、または嫁として、使用人として諸君の屋根の下に、聚つて來るものゝ運命が、諸君の徳の有無、厚薄によりて定まるのである、諸君はこの眞理を信じて貰ひたい。

　一部落にもその守神がゐられるやうに、守りの人物がゐるものである。その人が徳のある人であるならば、その部落には殃がない。人たちの心は和やかであり、牛や鶏や犬も平和に育つ。ところがその人が不徳であるならば、その部落には不幸が絶えない。爭や病やいろいろな災難が來るものである。

　國家にしても同様だ。われわれは上御一人の御民であつて、この方の土に、この方の飯を食べて生息して居る。われわれは愚かにも、自分の土の上に、自分の力食べて生きてゐると思つてゐる。まるで赤兒のやうだ。赤兒は母の恩を知らない。しかし、母の恩は晝な夜な赤兒の上にあるのである。日本が榮えるのは、御稜威である。われわれが樂しく生息してゐるのもみいつの賜物である。これを光と熱に例へよう。われらは太陽の光や熱よりは、炭や薪や電燈の光と熱をありがたく思つてゐる。ところが、太陽なければ、薪炭も電氣もないのだ。一歩進んで太陽の光よりも強い光がある、それは宇宙線といふもので、われわれの眼には見えないが、二吋厚の鋼鐵板を透つて、印畵紙に感光する。更にその上の光がある。それは心の光だ。これはわれらの五官には感じないが、魂には觸れて、それに影響を與へる。これこそ。宇宙に瀰潑してゐるもので、生命の根源であり、存在の究極である。われわれは誰しもこの光を藏してゐる。われわれが正邪[、]善悪、美醜を辨別するのは實にこの光の作用に外ならない。たゞ、われわれ凡夫は、無始以來の垢や埃によつてこの光を闇まされてゐるだけである。しかし、誰でも、正しい方法によつて、この垢を取つてしまへば煌々たる本來の光を發することが出來るのである。この光を稱して、神といひ佛といふ。萬物は神である。萬物には魂があるといふのも、萬物には佛性があるといふのも、このことである。萬物は大小無數の光の玉である。日月と星辰のやうなものだ。

　大君は日月にまします。大君は穢れていらつしやらない。大君には私利私慾の念はおありにならない。神そのものにまします。われわれをいつくしみ導き給はんがために、われわれと同様な身體を備へて生まれたまうたのである。これを大悲親と申す。われわれ國民はこの大悲親に包攝されて生まれたものである。かるが故に大君と申し、父上と申し、現神とは申すのである。そしてわれわれをば、み民と申し、赤子と申すのである。大君はわれわれをして、殘らず、御自分同様の神の域に引き上げたまはんとするのである。それが勅語となり法律となり、祭祀となり、いろいろな典禮や制度となるのである。われわれは、我慾の迷から眼醒めた瞬間、はつきりとこれを感ずるのである。そこでわれわれは、大君を御手本に神々の本來の面目に立返るべく大君の教のまにまに努力するのである。これが大君とわれわれとの眞の姿なのだ。これがわかれば、吾人の生活目標が「君に忠に」にあることが明瞭となる。余はこれを信ずる。諸君もこれを信じていたゞきたい。こゝで始めて、みいつの意昧がある。

努力

さてわれら何をなすべきか。まづ己を淨めなければならない。己をみ民に相應しき人格に磨きあげ、天業翼賛の大任を果すだけの力ある人間にしなければならない。そのためにわれわれはまづ禊ぐべきである。禊ぐことによつて、われわれは瞬間とはいへ、神の境地を體驗することが出來るのであつて、一旦その境地を體驗すれば、その清々しき状態から退轉しないやうに、もつともつと深き境地を究めるやうに努力すればよいのである。

　われわれは、自分で思つてゐるやうなつまらないものではない。われわれは神である、佛である。われわれは不滅である。われわれはなさうとして成遂げざるものゝない神佛同様の力の持主である。超人的といふことばがあるが、それは實は人的であつて、汚れた、不斷のわれわれが人間以下の境地にうろついて居るのである。せゝこましい我利我慾の殼に籠つた牛の如く、自分の天地を狭めてゐるのである。その殻を脱ぎ棄てよ。そしたら無限の蒼空が眼前に擴がるであらう。その殼とは何か。我利我慾と、それを得るためと信ぜられてゐる、小賢しさ、小怜悧さである。これを打棄てるのだ。惜しい。惜しいが打棄てる。打棄てた瞬間、それが決して、おのれの寶にあらずして實は桎梏であつたことを悟るであらう。そして、ひろびろとした、のびのびとした、得もいはれぬ喜びを味はふであらう。これを法悦とはいふ。禪の目標も、禊の目標もこの一點に外ならない。解脱とか、自由自在とかいふのもこのことである。

　すべての名人、即ち名賢、名將、名匠、名僧といつたやうな人たちは、いづれも淺かれ深かれ、この境地に近づいたものである。この境地に到つたものゝ特色は、名が現はれて、萬人の尊敬を受け、死んでもその精神が衆生を指導し、その魂は神として祭られることである。この境地に達した人には、もはや貧富も貴賤もない。天下の富は彼の富であり、天下の貴は彼のものである。唯彼は、勞して伐らず、功ありて[誇]らず[[2]](#footnote-2)で、そんなことを念としないだけである。

　諸君、余は諸君が、全部この境地に達せむことを望み、切願するものである。それは、諸君を愛してばかりではない。實に國の力の強まる道がこゝにあるからである。

どうぞ、諸君は禪をしてくれ。必らず、大いなるものを得る。そして、毎朝の清掃の行をしてくれ。そして、諸君の部落を完全に清潔な部落にしてくれ。これは、清潔そのものの功利的價値を覘ふばかりではない。それによつて生ずる、諸君自身の、及び諸君の同胞の精神的禊の効果を覘ふものである。

菩薩行とは、淨佛國土、成就衆生のことである。そのを淨め、そこに住める人間の心を淨めることが菩薩行であり、大東亞戰爭も結局は淨佛國土、成就衆生に外ならぬのだ。

青年層の今一ツの任務

戰爭は青年の仕事だ。兵隊さんも勞務員も青年である。前線も銃後も青年の天地だ。國家の運命は正に青年の心と血と汗とにかゝつてゐる。何と重大なる青年の任務だらう。

私は、青年たちに、殊に半島出身の青年たちに、今一ツの新任務を要請する。それは、青年諸君がそれぞれ自分の部落を背負ふことだ。

單刀直入に話すとせう。朝鮮には二千五百餘の府邑面があつて、それはまた十數倍の町洞などの部落に分れてゐるのだ。この部落の住民の多數は、不幸にして、まだ教育を受けてゐないものが多い。だから新聞も讀めず、廻覧板も讀めない。しかるに時局柄、矢繼早に上よりの命令が、要請が來る。これを、かの無教育な同胞たちは理解出來ないのだ。例へば、供出にしろ、徴用にしろ、物資節約、貯蓄、配給、戰況などにしろ、その趣旨が分らないものだから、揣摩臆測や、無知な流言や、不平が起るのだ。供出すべきを隱したり、徴用を逃れようとしたりすることも起るのだ。今まで、親切に彼等に説き聞かせる機關が足りなかつたのだ。

そこを青年たちが買つて出るのだ。部落中の青年層（必らずしも青年に限つたことではないが、青年には熱意がある。犠牲奉仕の精神が盛んなのだから）が起ち上つて、先づ自分たちで、[時局][[3]](#footnote-3)、戰局、命令、要請などの趣旨を徹底[的]に知るやうに努めて、そして、或は戸別訪問をしたり、或は婦人層だけを集めたり、或は部落民全部を集めて、自分たちの所信を説くのだ。そしたら部落民たちは、自分たちの子や兄弟や夫や親しいものゝ口から、説き聽かされるので、時局にしろ、戰局にしろ、徴兵、徴用、供出、勤勞奉仕の趣旨にしろ、氣持よく納得が出來る。知らない、偉い人たちに説かれるよりも、かへつて親しみがあり、解りがよい。

かういふ風にして、國家の意思を、民衆によく傅へて、よく得心させることは、大いなる戰力増強であるばかりでなく、同時に大和一致の基となり、民衆生活のつらさを減じて明朗性を増すことゝなる。譯の解らぬことをやらされる、いやいやながらひきずられるよりつらいことはないのだ。

以上趣旨の徹底、即ち宣傅部門であるが、生活改善の部門にも、この青年團結が中心力となる。

生活改善の根本をなすものは、思想の統一、國民精神の昂揚であるが、これも各々の部落の青年の團結によってなさるべきなのである。思想の統一とは何か。「われは天皇の御民なり」の信念の上に立つて、政治に對しては爲政當局を信じ、戰爭に對しては軍部當局を信じ、この大東亞戰爭に於いて日本の正しさを信じ、日本正しきが故に天祐天命日本にあることを信じて、臆測や流言や敵の謀略にかゝらないことであるが、部落の青年層が一團となつて、神祠を崇敬し毎日宮城を遥拜し、必勝の所願をすることによつて、部落民全體にこの思想を打込むことが出來るのであつて、この實賤による示範以外に道はないのである。

次に、土を耕すのも、魚を取るのも、すべては國家への御奉公である。井戸を浚ひ、道を直し、山に樹を植える、これが皆その部落のためであり、同時に國家のためである。まして兵隊となり、應徴士となることは直接身をもつて大君のために御奉公申上げることである。人間萬事、生まれて死ぬ時まで、すべての働きは大君のためであり、國家のためである。この精神が即ち國民精神であり、日本精神であつて、この精神を體得した刹那、わが身は悠久なる國運の一環であり、わが勞力は無窮なる皇運の翼賛となるのである。この中から大いなる尊嚴と喜悦が沸き出で、人生は眞に生き甲斐ある人生となるのである。

部落の青年たちが、この精神を發揮して日常範を示せば、部落民全體は知らず知らずこの精神を體得するのだ。それこそ、部落をば眞に富貴な部落にすることである。

また、青年たちは、或は代書によつて、或は共同勤勞奉仕によつて、或は衛生、厚生の努力によつて、物の共同賣買によつて、或は勞力の組織によつて、直接部落民の苦痛を減じ、福利を増進することができる。例へば、青年たちが朝の若干の時間を裂いて、部落内の清掃をするとしたら、旬日の中に、その部落は見違へるほど清潔な、氣持のよい部落となることだらう。農閑期の、或は朝晩の共同勤勞によつて、よい井戸や、子供たちの遊場や、部落民の集會場などが出來ることだらう。共同炊事、託兒所、共同浴場なども、決して難しいことではない。かういふことは、部落民の樂しみや、健康や、富を増加することであり、協同相愛、隣保互助の尊い精紳を涵養することである。

青年團體が、入營出征者、應徴者の家族を助けることも美しいことであり、征くものをして後顧の憂なからしむるものである。

かゝる青年たちに護られる部落に犯罪など起らうはづはない。税金の滞納その他、國民の義務の怠慢があらうはづはない。かゝる部落に喧嘩口論などないことだらう。實にそれは樂しい、尊敬すべき部落になることだらう。

一年二年とかういふ生活が續くに從つて、部落民には無知なものも不道徳なものも跡を斷つに違ひない。南京虫や蝿も居なくなるに違ひない。恐らく極貧者もなくなるだらう。山や野の姿さへ變ることだらう。村の建物や道路や、住民の顔色や、身装がすつかり變ることだらう。青年諸君よ。これが、諸君によつて造りかへられた、諸君の郷里の姿なのだ。諸君は、もつともつと自由に、諸君の郷里の構想を練るがよい。諸君の氣に入つた部落を作り上げる力を諸君自身がもってゐるのだ。

青年挺身隊の指導者諸君に告ぐ

同志諸君！　余は最大の信頼と敬愛の衷情を以て斯くは呼ぶ。諸君は國難を救ひ、民生を救はむために契り交はした同志である。權力によつたのでもなく、利益によつたのでもない。われわれは憂國の至情によつて一緒に働き一緒に死ぬべく固まつたわれわれである。歴史上これより大いなる同志が曾つてあつたらうか。

今は國家存亡の秋である。是が非でも一億一心の總力を發揮せねばならない。朝鮮の三千萬の民族的使命今日より大なりしこと曾つてなかつたのである。大帝國日本の運命のみならず亞細亞の運命を荷つてゐる今日である。しかしてこれは單にわれわれの主觀的信念であるのみならず實に國家により、かく信頼され、附託されたのであり、且つ大勢上事實上その通りである。

翻つてわが朝鮮同胞の現狀を觀るに未だ足りない點が多い。それは概ね三つに分けられると思ふ。その一は思想の點である。思想とは團體觀念と大東亞戰の意義と勝敗に關する信念及朝鮮民族の地位に關する認識であつて、日本は最も正しき國家であり、大東亞戰は正義の戰であり、天われに與するが故にわれ必らず勝つ。しかして、朝鮮民族は大和民族と同祖同根にして、秋毫も差異あることなき天皇の臣民であるといふのが正しき思想である。これに反する思想は正しからざる思想であり、敵性思想であり、朝鮮人自滅の思想である。民衆にこの思想を普及し確實にするのが、われわれの第一の使命で、青年挺身隊の約束の第一項にある通りである。

朝鮮同胞の第二の缺點は道義的欠陥である。これは必らずしも朝鮮同胞だけの缺點ではないが、わが挺身隊の關するところは差當り朝鮮同胞問題である。この道義的缺陥とは何か。その根本をなすものは利欲的個人主義である。自分最上主義的であり、國家や部落や人のことはどうでもよいといふ、ユダヤ的思想である。虚偽、猜疑、不誠實、不信義、無責任、不親切、公徳心缺乏など皆この利慾的個人主義から發してゐる。自分に利あれば嘘をつく。害ありと見れば信義も責任も弊履のごとし。公園[の]花も欲しければ折る、道路に啖を吐く。皆この類である。これでは朝鮮人の民位はぐんぐん下る一方で、つひに國家に見放され、同胞に見放され、到る處に於いて排斥されて、しまう他道はない。朝鮮人は嘘をいはぬ、詐りがない。誠實である。率直である。信義に厚く、責任觀に強く、團結力があるといはれるにあらざれば、朝鮮人は國家からも同胞からも信頼されることはないであらう。從つて朝鮮人の地位は決して向上せぬであらう。この點を直すのがわれわれの使命である。その使命を果すには、われわれ自身誠實、信義、責任感の權化とならねばならない。これこそ朝鮮人を救ふ道であり、唯一の道であるのだ。吾人の早起清掃や、町會の手傅は小さなことであるかも知れないが、身を以て非利慾的な非個人主義的な、國家至上主義的な、獻身奉公的な範を示すよすがとなるものである。

その三は實踐[への]怠慢である。国家の命令や指導に對して、はいはいとてきぱきとせず、ぶつぶつ不平をいつたり、出すものを出ししぶつたり、なるべく逃れようとしたり、我關せず焉の態度を取つたり、傍關的批判的だつたり、甚しきに至つては、他人に對してこれを誹謗したり、歪曲したりする根性である。例へば納税を怠る。物資供出を澁る。當局者の言明を裏返しにするといつた類で、これは單に憎むべき行爲たるばかりでなく、その人自身の人格の卑劣、陰險、邪惡なるを現はすのである。かくする本人は如何にも利巧者のつもりであり、高級インテリのつもりであるが、その實國力を損ひ、民衆を惑はす大罪人であるばかりでなく實に朝鮮人全體の信用を落し品位を下ぐる罪人でもある。當人にしても決してそれによつて利益は得られぬであらう。よしんば法網を冤るゝにしても神明の嚴罰は遁るべくもないのである。

そこで、「はいはい」と氣前よく國家の命令指導に從ふばかりでなく、割増しにて應ずるやうに、この民衆を向け直すのがわれわれの使命である。かうなつて始めて朝鮮人は、立派な民族の位に上るであらう。國家によつては信頼され、同胞からは愛され、地球上如何なるところへ行つても大國民として讃仰されるであらう。かういふ敬ふべき國民になつてこそ、日本を輝かして上皇恩に報いたてまつり、廣くアジヤ諸民族の先輩指導者となり得るであらう。

以上三つのこと、思想のこと、道義のこと、實踐のことが吾人の使命であり、諸君の畢生の大事業であり、諸君の子孫に遺すべき大使命、大遺訓でもある。

さて、この三點に關する指導革新は何によつてなさるゝか。それは吾人自身の鞏固なる團結によつてのみ可能である。言換へればわれわれ自身先づその人に成り、しかしてその人等の團結の威力によつて同胞を導くのである。團結の力は如何なる偉人の力よりも大きい。個人の力や壽命には限度があるが、團結のそれは無限である。だからわれわれはまづ、われわれの團結を不變不動不壞のものにしなければならない。そのためにわれわれは四つの點を考へる。

其一はき同志を求める事である。淨き同志とは名利慾から離れた同志のことである。此聖なる目的のために完全に私を滅する同志の事である。かゝる同志を一人一人求めるのである。團結の力は團員の數よりも質によつて極まる。酒の力は其全量よりも含有されたるアルコールの量によると同じであつて、唯の水を多く入れたら益々酒の力を弱めて所謂悪酒となるのである。

その二は、一旦得たる同志を失はぬことである。十人の同志を得ることよりも一人の同志を失はぬことが大切である。何となれば同志は古いほど力があるからだ。

その三は規律と指導者に服從することである。團結とは何か。それは規律と指導者に服從する一群の同志のことである。規律は國家に於いては法であり、指導者は國家に例へれば首相である。不變とは志の變らざることであり、不動とは如何なる困難に遭遇しても規律亂ず統制壞れぬことである。かくあつて始めて、金剛不壞の同志的結束となるものである。

指導は淨く正しく徳あり力ある人を要するのであるが、適任者を得ざる場合は假に誰かを指導者にするのが避くべからざる條件である。しかし、一旦指導者として据ゑたからには、その團結に關する限り、その指導者の指導に服従するのが團結の道であり、信義である。時によつては、自分よりも劣つたものが、指導者になることもあらう。それでも服從するのが團結の道である。その指導者の代るまでは服從しなくてはならない。指導者が氣に喰はぬからといつて、服従しなければ、その團體は死ぬ。團體が死んだのでは大いなる使命は達成せられないのである。

その四は團員各自が、その團體を自分のもの、自分の責任下のものと思ふことである。責任轉嫁ほど卑劣なことはない。或は責任を幹部に、或は他の團員に轉嫁するほど不道徳なことはない。これも朝鮮の痛ましい通弊の一つだ。

その五は情誼である。情誼とは愛情のことだ。挺身隊を大事にし、その役員たちを愛し、隊員相互に愛し合ふことを意味する。同志として義理も重要であるが、愛情も重要である。義理は紐で結び合はせる力であり、愛情はお互の體の暖かい香はしい分泌物によつて粘着し合ひ融け合ふ力である。和は愛より生じ、力は和より生ずる。お互に名を覺え、顔をなじみ、お互の家族とも親交を結ぶことが、團結を強めるのと大いなる力をもつ。そしてお互に信じ合ふ。決して疑はない。同志に欺されることはつらいことであるが、また美しいことである。相手を信じて疑はないことは人生の最大の美徳であつて、しかして、朝鮮人にもつとも缺けたところである。

それだからといつて、同志は義兄弟ではない。お互に助ける事はいゝが頼つてはならない。依頼心は意氣地なさを意味するばかりでなく、また情誼を損ふ大いなる原因となるものである。

多勢の同志の中には顔も名も知らぬものもあるであらう。それでも、同志と知つたからには信じ愛することに變はない。一面舊知の如くである。

孔子は二人同心共其利斷金同心之言其臭如蘭と曰うたが何んと美しいことであらう。正にその通りである。われわれは將に千人同心を目標とてゐるのである。千人同心の力は驚くべきものがある。この力によつて、我が區を理想的皇民的郷土となし得ぬことがあらうか。いや全朝鮮を全日本を完全なる皇民郷となすこと一點の疑も容れぬところである。しかし、成功は早急に來ない。第一われわれ自身の陣營を整へることでさへ一朝一夕の業ではないのである。一茎の草花が咲くにも一個人の休まざる努力を要する。一本の松の樹がその本來の風格を備へるに數百年かゝる。まして數千萬の民衆を作りかへることがさうたやすく出來るはづはない。しかしわれわれの努力は一點一劃も消えることはない。積もりに積もつて太をなすのである。今夜のこの會合も決して無意味ではない。次に來るものゝたしかな原因となるのである。惡にしろ善にしろ落された種は必らず實を結ぶ。われわれの誠實なる努力の休まざる限り、刹那々々われわれは目標に向つて進みつゝあるのである。

われわれが民衆の指導者となるためには先づ民衆の信頼を獲得しなければならない。民衆は如何なるものを信頼するか。自分たちのために盡してくれる人を信頼する。求めることなくして、ひたむきに己を與へてくれる人を信頼する。民衆は小兒のごとく正直であり、また神のごとく聰明である。民衆は決して欺されるものではない。狡獪なる偽善者が一時民衆の眼を眩ますことはあらう。しかし、いつかは民衆の怒の目がそれを看破る。

民衆は又猜疑深く、鈍感である。欺され通した民衆に於いて尚しかりである。最初のほどはわれわれの誠意は中々民衆に通らぬ。或は嘲笑され、或は敵視されることもあらう。また惡しきものゝ中傷もあらう。民衆の心がわれわれに、向いて來ると知れば、必らずそれをむ敵も現はれる。これは必らずあることだ。

だからわれわれが民衆に信頼されるまでには相當長い時間の誠實なる努力の繼續が必要である。三日天下では何にもならない。「またか」といふ眼で民衆はわれわれを眺めるに定まつてゐる。しばらく騒いだら直ぐ止めるだらうとせ[ゝ]ら笑つてゐる。それはわれわれの先輩がさうであつたからである。われわれはかゝる民衆の期待を裏切らねばならない。その意表に出でて、彼等をびつくりさせねばならない。彼等をして、「青年挺身隊は見直した。日が經てば經つほど益々盛んであり、愈々眞劍である」と驚きの目を瞠らさねばならない。その時こそ、民衆はわれわれに靡いて來るのだ。その時にこそわれわれの抱負は實現されるのだ。その時までが峠の上りである。われわれは最後の五分まで、最後の一尺まで頑張らねばならない。山を爲す九仞の功を一に虧く[[4]](#footnote-4)ことがあつてはならない。その時にはわれわれの理[想][[5]](#footnote-5)は實現されるのだから。その時こそわれわれは皇運翼賛の一大事業をなし遂げるのだから。朝鮮同胞を力強く品位高き國民にすることこそ最高最大の皇運翼賛であるのだから。

しかし、われわれは民衆の信頼を獲得する前にも、目下の戰力増強のために奮闘しなくてはならない。われわれの分に應じ、手の届くことをやるのである。例へば明日の祝日を期して正しき國旗掲方の指導をする。民衆はまだわれわれを信頼もしないし、尊敬もしないのだから、われわれは彼らに號令をかけるわけには行かない。身をもつてその間違を訂正し、丁寧に國旗の尊厳を説き聞かせるのである。しかしこゝにも見敵必殺の気魄は必要だ。手段こそ奉仕的であるが、責任もつて所期の目的を達成しなくてはならない。蛇の生殺しではかへつて後のがある。諸君は銘々町内に於いて指導するのだから、誠意と根強さゝへあれば必らず所期の目的は達成出來ると思ふ。明日一日、われわれはわが町内の國旗尊嚴徹底運動にさゝげよう。そして、わが町内を歩くものをして國旗掲揚に對し、この町内は申分なしといはしめよう。一旦定めたことは必ず徹底するといふわが青年挺身隊の第一の傳統を立てよう。

今後われわれは、或は納税期に、或は蝿の發生期に、或は徴兵檢査の際に、或は愛國班の常會に仕事は多々あるのであるが、すべて民衆のためになることは買つて出て、默々と働くのである。これが即ち戰力増強であり、郷土の民位向上であり、また民衆の信頼を獲得する行を積むことにもなるのである。

諸君は諸君の町内の民衆の信頼を受けて、町内の指導力を握ることにより、國民の指導者たる力を養ふのである。諸君は單に朝鮮民衆の指導者であるだけではないのだ。諸君は一億國民全體の指導を許されて居り、且つ附託されて居るのだ。諸君は、われは朝鮮人なりといふ卑劣な考へを棄てなくてはならない。諸君は日本帝國の指導者をもつて自から任ずべきである。古人のことばに「人必らず自ら侮りて後人之を侮る」とあるが、正にその通りである。諸君は押しも押されぬ日本の青年であり、日本の青年挺身隊の指導者である。やがて諸君は、大御心を體したてまつつて大東亞の指導者となるべき堂々たるである。實に諸君の任たるや重く、光榮たるや大きい。

最後に、朝鮮同胞の地位と運命に就いて一言しよう。前にも述べたごとく、現在の思想や道義性や實踐では駄目だ。必らず卑しめられ必らず滅びる。諸君が約束した方向に一大轉換をなし割増奉公をしてこそその地位は最高限までに高められるのだ。この點については一點の疑をも容れる餘地がない。諸君。わが大君は福徳圓満なるにまします。わが大君のしろしめす國は正しき國であり、敗れぬ國であるのだ。いはんや[朝]鮮三千萬、盡忠報國、物により、汗により、血[に]より、魂により、しかして優れたる理想によつて、護りたてまつり翼賛したてまつるに於いてをやである。諸君。われわれは皇道によつ[て]照らされる明日のアジヤの平和郷と大文化とを目あて、ひたむきに進まう。

1. 『新時代』1944年10月号 [↑](#footnote-ref-1)
2. 原文は「功ありて居らず」 [↑](#footnote-ref-2)
3. 原文は「時間」 [↑](#footnote-ref-3)
4. 「九の功を一にく」は最後に手を抜いたため失敗すること。 [↑](#footnote-ref-4)
5. 原文は「理相」 [↑](#footnote-ref-5)